

復興の主役は県民と確信

福島県知事 もう二年、まだ二年

「あれから二度目の三月十一日を迎えました。大切な人を亡くされた方、住み慣れた我が家を離れて暮らす方、震災前の生活を取り戻しつつある方、新しい人生を歩み出した方……」

振り返りますと、『もう二年』であり、『まだ二年』でもあると感じるのではないのでしょうか」と始まり、再生可能エネルギー推進の取組も進むなど、少しずつ成果が現れてきていると現状を分析し、「その支えとなつてい

るのは、県民の皆さんの努力と、全国、そして世界の皆さんからの応援であり、改めて、心から感謝を申し上げる」として

福島第一原子力発電所の現状については、「いまだに収束に至らず、避難生活を送る県民は十五万人を超えている」と指摘する一方、「事故そのものが人々の記憶から薄れ、その深刻さが忘れ去られてきたような動きさえ見られる」と、事故が風化しつつあるとの認識を示し、現状を憂えている。

同知事は、「事故の収束と県内の原子力発電所すべての廃炉を粘り強く求め続け、その実現に努めていく」と改めて表明した後、「復興とは何か、それは、震災前のふくしまに戻るのではなく、震災を転機として、すべ

ての県民が、それまでよりも、もっと幸せになり、心から笑顔になれる、福島県民であることを誇りに思える、そうしたいと強調し、「復興の主役は、まさに県民の皆さん一人ひとりにあり、強い意志を持って心を一つにして前に進んでいく限り、必ずや復興を成し遂げることができると私は確信している」と述べている。

東京電力は事故から二年となる十一日、福島復興本所で、廣瀬直己社長らによる訓示を行った。廣瀬社長は冒頭、震災被災者への見舞いと事故により大変な苦勞をかけた被災者一人一人の心

をなやませたいと述べ、賠償、除染、廃炉の取組とともに、事故を教訓に「妥協することなきない」としたほか、本

社設置からの二か月半で、社員らに対し、「われわれの取組の原点は福島にある」として、「できるだけのことを、自分自身で先頭に立って頑張ることを求めたい」と述べ、

また、復興本所代表を務める石崎芳行副社長は、「歴史に残る大事故の責任から逃れることはできない」としたほか、本

地内の破壊帯調査などの原子力の安全確保に向けた取組の他、危機管理体制、事故時の影響緩和、規制行政に対する信頼回復の取組について、概要を取りまとめた。福島ウエブサイトにも掲載されている。

規制委員会は十一日、二年九月からこれまでの同委員会の取組状況を公表した。規制委員会設置法成立に伴う参議院附帯決議を踏まえたもの。福島第一発電所の安全確保、安全基準等の見直し、敷

ためまぬ安全向上使命 規制庁訓示「福島が原点」

原子力規制委員会の田中俊一委員長は十一日、福島第一原子力発電所事故から二年に際し、規制庁職員らに訓示を行った。

田中委員長は、同委員事務局として支えてきた規制庁職員一同の努力に敬意を述べると、原子力災害に関し、これまで自身も除染活動に取り組

み、出身地でもあることから、「福島が原点」として、避難民の状況を振り返った。その中で、浪江小学校からの手紙を紹介し、事故前に六百人いたる児童が十八人にまで減少し、新入生もない現状をあげながら、「事故

の罪がいかにかを感ずるべきでない」と述べ、職員らに対し、「われわれの取組にゴールはない」と訓示し、たゆまざる国内の信頼回復、原子力の安全向上に努めていく使命を改めて強調した。

規制委員会は十一日、二年九月からこれまでの同委員会の取組状況を公表した。規制委員会設置法成立に伴う参議院附帯決議を踏まえたもの。福島第一発電所の安全確保、安全基準等の見直し、敷

地内の破壊帯調査などの原子力の安全確保に向けた取組の他、危機管理体制、事故時の影響緩和、規制行政に対する信頼回復の取組について、概要を取りまとめた。福島ウエブサイトにも掲載されている。

規制委員会は十一日、二年九月からこれまでの同委員会の取組状況を公表した。規制委員会設置法成立に伴う参議院附帯決議を踏まえたもの。福島第一発電所の安全確保、安全基準等の見直し、敷

地内の破壊帯調査などの原子力の安全確保に向けた取組の他、危機管理体制、事故時の影響緩和、規制行政に対する信頼回復の取組について、概要を取りまとめた。福島ウエブサイトにも掲載されている。

規制委員会は十一日、二年九月からこれまでの同委員会の取組状況を公表した。規制委員会設置法成立に伴う参議院附帯決議を踏まえたもの。福島第一発電所の安全確保、安全基準等の見直し、敷

地内の破壊帯調査などの原子力の安全確保に向けた取組の他、危機管理体制、事故時の影響緩和、規制行政に対する信頼回復の取組について、概要を取りまとめた。福島ウエブサイトにも掲載されている。

全庁一体で復興・再生を推進

新生ふくしま復興推進本部 緊密な連携図る

福島県は復興を実感できるよう、国や市町村などと緊密な連携を図りながら、全庁一体となって復興・再生の取り組みを加速していく

ため、「新生ふくしま復興推進本部」を衣替えし、窓口一元化や調整機能の強化を図った。

組織改正のねらいは、総合計画・復興計画の改定、福島復興再生総局の設置

など国の復興体制の強化などに対応し、全庁一体で、復興・再生を推進す

る体制を整備し、スピード感をもって、確実に福島の新再生を実現すること。

同本部は、国の復興庁や市町村との窓口として、一元的に対応するほか、事務局(事務局長)企画調整部長の総合調整機能の強化を図り、①新たな課題への対応の既存プロジェクトチーム活動③生活拠点・帰還支援④除染・廃棄物対策⑤避難者支援——を強化するた

め、知事部局の職員数を大幅に増員する。

同本部は、国の復興庁や市町村との窓口として、一元的に対応するほか、事務局(事務局長)企画調整部長の総合調整機能の強化を図り、①新たな課題への対応の既存プロジェクトチーム活動③生活拠点・帰還支援④除染・廃棄物対策⑤避難者支援——を強化するた

め、知事部局の職員数を大幅に増員する。

同本部は、国の復興庁や市町村との窓口として、一元的に対応するほか、事務局(事務局長)企画調整部長の総合調整機能の強化を図り、①新たな課題への対応の既存プロジェクトチーム活動③生活拠点・帰還支援④除染・廃棄物対策⑤避難者支援——を強化するた

め、知事部局の職員数を大幅に増員する。

同本部は、国の復興庁や市町村との窓口として、一元的に対応するほか、事務局(事務局長)企画調整部長の総合調整機能の強化を図り、①新たな課題への対応の既存プロジェクトチーム活動③生活拠点・帰還支援④除染・廃棄物対策⑤避難者支援——を強化するた

除染や廃止措置など重点

文科省 2013年度原子力予算説明

文部科学省は十四日の原子力委員会、二〇一三年度政府予算案約千六百八十七億一億七千万円と、原子力関係予算について説明した。

見積りに関する基本方針を踏まえて、三つの重点項目を推進することとし、①除染や廃止措置に向けた研究開発等の福島対応に百億円(同十四億円増)、②廃止措置・廃棄物対策に二百四十三億円(同十二億円増)、③原子力安全確保等に三十六億円(同十二億円増)で計三百七十九億円(対

前年度比一一%増で三十九億円増となっている。一三年度予算案のうち、千二百六十二億円は核燃料サイクル研究開発・基礎基盤研究等に充てられており、高速増殖炉サイクル技術については二百八十九億円(同十億円減)のうち、「もんじゅ」については百七十四億円(同十億円減)、高速増殖炉サイクル実用化研究開発については二十八億円(同五億円減)としている。

その他、原子力損害賠償等の円滑化(同十二億円増)に四十六億円を充てている。

量子ビーム・核融合研究予算は、JAEA予算等として別途要求している。

除染や廃止措置に向けた研究開発等の福島対応に百億円(同十四億円増)、②廃止措置・廃棄物対策に二百四十三億円(同十二億円増)、③原子力安全確保等に三十六億円(同十二億円増)で計三百七十九億円(対

前年度比一一%増で三十九億円増となっている。一三年度予算案のうち、千二百六十二億円は核燃料サイクル研究開発・基礎基盤研究等に充てられており、高速増殖炉サイクル技術については二百八十九億円(同十億円減)のうち、「もんじゅ」については百七十四億円(同十億円減)、高速増殖炉サイクル実用化研究開発については二十八億円(同五億円減)としている。

その他、原子力損害賠償等の円滑化(同十二億円増)に四十六億円を充てている。



エネ政策対話で原子力に関心

日本とポーランドとのエネルギー政策対話が十三日、経済産業省で行われ、それぞれ赤羽一嘉副大臣(写真左)とトムチキエヴィッチ経済省副大臣が対談に臨み、原子力分野を含む今後の協力の方向性について意見交換を行った。

ポーランドは、エネルギー安全保障、地球温暖化の観点から、原子力発電に関心を有しており、既に一〇年三月に、日本との間で原子力平和利用に関する協力合意文書の署名が行われている。

計画では、二〇年までの初号機運転、三〇年までに六百万kW規模の導入を目指している。

ポーランドは、エネルギー安全保障、地球温暖化の観点から、原子力発電に関心を有しており、既に一〇年三月に、日本との間で原子力平和利用に関する協力合意文書の署名が行われている。

計画では、二〇年までの初号機運転、三〇年までに六百万kW規模の導入を目指している。

ポーランドは、エネルギー安全保障、地球温暖化の観点から、原子力発電に関心を有しており、既に一〇年三月に、日本との間で原子力平和利用に関する協力合意文書の署名が行われている。

霧箱使った研究で受賞

中一生 目に見えぬ放射線に興味

リバネス出版はこのほど、中学生・高校生の科学研究レポートを対象にした「someone」を

「霧箱で目に見えないものをしよう」を課題として霧箱を作り、放射線の可視化を行った。さ

らに種々の物質のガンマ線への効果について、放射線測定装置を使用し、放射線源からの距離と線量の関係について調べている。

また、レンガやコンクリート、アルミ板など、様々な物質の遮へい効果

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

「someone」を研究では、まず目に見えない放射線を見る道具として霧箱を作り、放射線の可視化を行った。さ

らに種々の物質のガンマ線への効果について、放射線測定装置を使用し、放射線源からの距離と線量の関係について調べている。

また、レンガやコンクリート、アルミ板など、様々な物質の遮へい効果

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

「someone」を研究では、まず目に見えない放射線を見る道具として霧箱を作り、放射線の可視化を行った。さ

らに種々の物質のガンマ線への効果について、放射線測定装置を使用し、放射線源からの距離と線量の関係について調べている。

また、レンガやコンクリート、アルミ板など、様々な物質の遮へい効果

安全目標は時間かけて検討を

近藤原子力委員長 近藤俊介・原子力委員長(当時)は東京大学理工学系研究科教授)は十四日、原子力規制委員会が十年を経て安全目標の議論を再開することについて、考えを述べた。同氏は二〇一三年十二月当時、旧原子力安全委員会の安全目標専門部会で「安全目標に関する調査審議状況の中間とりまとめ」を部会長として取りまとめた。

近藤委員長は、十年前に検討した時を振り返り、「いろいろな思いをこめて作ってあるので、今日正しく整理整頓するべきだ」と述べている。数字を使っている状況で「国内に基準がないのが不思議」とし、議論のフロセスの中で様々な事柄と強調した。

近藤委員長は、十年前に検討した時を振り返り、「いろいろな思いをこめて作ってあるので、今日正しく整理整頓するべきだ」と述べている。数字を使っている状況で「国内に基準がないのが不思議」とし、議論のフロセスの中で様々な事柄と強調した。

放射線育種など 十二か国で議論

FNCA 第十四回アジア原子力フォーラム(FNCA)コーディネーター会合が

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え

を測定して、放射線量が放射線源からの距離の二乗に反比例していることを示し、物質の密度と放射線量の関係も導いた。受賞した萬谷さんは、「小学六年生の時、原発事故が起き、放射線という目に見えない物質に恐怖を覚えると同時に見え